

難波田春夫著

『國家と經濟』（第一卷序説）

中山伊知郎

『經濟學』についての基本的考察は當然「國家と經濟」と云ふ問題の根本にふれて來なければならぬ。従來の科學としての經濟學は國家から解放せられることによつて成立した。しかし經濟をそれ自らに於て眺める如きいはゆる「經濟學」はもはや歴史的意義をしか持ち得ない。現在ではそれを何よりも先づ國家との關聯に於てとらへる如き新しき經濟學が立ちあらはれて來なければならぬ。理想としての國家と現實としての經濟と、使命としての國家と運命としての經濟と、これらの兩者の關聯を解明することにこそ經濟學の現代的課題があるのである。』
これが本書の主題であり、同時に「序説」としての此の第一卷の主張である。

書評

國家と經濟との關係を全面的にとりあげることが確かに現代の經濟學に課せられた最も重要な課題の一つに相違ない。吾々はこの意味に於て既に本書の濼測たる登場を歓迎せねばならぬ。經濟學の原理的考察に於て焦點とされたものは曾ては價值論であつた、方法論であつた。又ある時にはむしろ唯物史觀であつた。いまやそれは新たに國家と經濟との關係として提出せられたのである。吾々はこゝに本書の新鮮なる魅力を語ることが出来るであらう。唯とり扱はれてゐる問題は著者の自ら認めるやうに決して容易なものではない。従つて問題の展開についてはこの序説の關する限りに於ても種々の異見が成り立ち得るであらう。以下率直にその二三の點を記して見よう。

先づ第一の點は従來の經濟學が主として國家からの解放によつて成立したと云ふ主張である。著者は云ふ、従來の經濟學は「均衡の經濟學」と「波動の經濟學」と「崩壞の經濟學」とに分類せられるのであるが、それらの經濟學は何れも國家又は政治から解放されることによつて

科學となり得たものである。即ちそれらは何れも經濟をそれ自らとして眺めることによつて、それぞれ均衡の、波動の、乃至崩壞の必然を説き得たものである。しかも彼等はこのことを充分に意識してゐない、そこに彼等の缺點がある。即ちこれらの經濟學はそれ自らとしての經濟の必然を説く限りに於て何れも正當である。けれどもその最大の缺點は經濟の必然が單なる必然ではなくて「變容せられ得る」必然であることを看過した點にある。従つて經濟の變容せられ得ることが認識せられ、進んで經濟の必然が現實に行はれざるに至つた現代に於てはかかる變容を認めざる從來の一切の經濟學は過去のものとして葬られねばならぬ、と。

吾々はこの主張の前半に對しては必ずしも賛成を惜むものではない。蓋し近世資本主義の發達初期に於ける經濟の國家からの解放が經濟學の發達と併せ考ふべき事實であることには恐らく何人も異存はないからである。けれどもこの主張が果して著者の積極的見解に對する支持として充分であるかどうかに至つては吾々は容易に之を

肯定することが出来ない。即ち著者は近世經濟學の成立に於ける國家からの解放に特に重點を置いて科學としての經濟學は「國家なき經濟學」としてのみ成立し得たかの如く主張されるのであるがそれは果して正當であらうか。經濟學の成立はその様に云はゞ消極的にのみ規定されるべきものであらうか。經濟の必然は國家の作用を除外した場合に於てのみ顯現すべきものであらうか。吾々の見るところは必ずしもさうではない。一つの科學としての經濟學の成立は何よりもその積極的な内容について問題とせられねばならない。さうして若しその積極的な内容が問題とせられるならば國家の作用の強弱は必ずしも經濟の本質そのものをかへるものではないであらう。

この主張の後半も亦それ自らとしては正當である。即ち經濟はたしかに變容せられ得る必然である。或ひは一層直接にそれは國家によつて變容せられ得る運命であらう。しかしこの主張の前半と後半とは果して相互に支持する一體として結合せられ得るであらうか。吾々は之を疑ふものである。即ち若し從來の經濟學がそれ自らの積

極的内容によつて成立つものとせられるならば、經濟の變容し得る性質の發見は必ずしも直ちに從來の科學としての經濟學の存立を否定することにはならないであらう。しかしこの點を明にするためには吾々は進んで著者の「變容」の意義を問はねばならない。

經濟を以て變容せられ得る必然とする著者の考へ方は主としてマックス・シェーラーに依存するものであつて、それは根本的には精神と物質との關係によつて規定せられてゐる。即ち經濟はまさに物質的なものとして「必然」なる法則の下に立ち、それ自らの運命をもつものであるけれどもこの場合の運命は精神の「示し導き」によつて「變容せられうる運命」なのである。茲に經濟を「示し導く」べき精神が「國家の中なる國家」として規定せられてゐることは云ふまでもない。經濟はかゝる國家の「示し導き」の下に於てはもはや單純なる必然ではなく單なる運命ではない。從來の經濟學は經濟のみの系列に於ける必然を以て全部と考へたところにその誤謬をもつ。かかる一面的なる經濟學は時代が恰も經濟のみの系列を實

現するかに見えた所謂經濟時代(ゾムバート)の産物である。けれども現代はこの經濟時代に新なる變容が要求されつゝある時代である。否この要求が如何なるところに於ても何等かの形に於て既に實行に移されつゝある時代である。それ故に、經濟學も亦經濟のこの變容に應じて「國家なき經濟學」の變容を語るもの、換言すれば統制經濟について語るものでなければならぬ。

吾々はここでも亦今日以後の經濟學が統制經濟について語らねばならないと云ふ著者の主張に何等の異存を挟むものではない。しかし乍らかくの如き經濟學と從來の經濟學との相違は「變容し得る」經濟學と變容し得ることを忘却したる經濟學との對立に歸着せられるであらうか。統制を語る經濟學は從來の經濟學の一切の内容を過去のものとして葬り去るが如きものであらうか、疑なきを得ない。この場合若し從來の經濟學が單に消極的に國家の排除によつて科學にまで成長し得たのであるならば或ひは著者の主張が文字通りに成立するであらう。しかし若しさうでないとするればこゝには尙吾々の考察を要求

するとところの多くの問題が横はるものと思はれる。

吾々がこゝで問題をかゝる形で提起するのは端的に云へば誕生すべき統制經濟學の效果に關係する。著者の言葉に従つて云へば經濟の變容をとりあげる經濟學がその結果に於て充分に有效なるためには從來の經濟學に於ける積極的に經濟的なるものの内容が更に強く顧みられねばならないであらうと云ふのである。尤もこの恐らくは甚だ常識的なる設問は本書に於ては既に應へられてゐるとされるかも知れない。蓋し著者は經濟の必然が均衡か波動か崩壊かを自ら問ふて、之を「矛盾の必然」であると論定されてゐるからである。又「矛盾の必然」は經濟學の積極的内容としてのみ、確立されるところだからである。著者が私信に於て經濟學の眞の理論を以て均衡論の終るところから始まるとされるのもその意味であらう。この後の言葉も亦それが均衡成立過程の再吟味の必要を指示する限り私に於て何等反對すべきものをもたない。しかし乍らこれらの見解が進んで新に變容せらるべき經濟の内容規定に如何に關係すべきかの論述に至つて

は不幸にして充分の展開を見出し難いのである。

吾々の云ふところはこの「序説」に對して餘りに多くの内容を求めるものであらう。吾々はこれらの點が來るべき續編に於ては一層明かに示されるであらうことを信じて疑はない。又云ふところの總ては著者の力點とは反對に餘りにも經濟的平面に執着するものであらう。吾々はむしろかゝる平面の位置を見定めんとする著者の企圖から多くの學ぶべきものゝあることを忘れてはならないのである。しかし、否むしろそれ故に、吾々はこの新なる平面が經濟的平面の問題を充分にふくむべきことを期待するのである。吾々は著者の立つ平面の高さを認める、著者はその才能を以てこの高さへ人々を導く義務をもつものであらう。